

ロマンシンググサガ

作

藤田
久雄

登場人物

ヒロシ 自分の性に対して疑問に思い、彼女以外に想いを寄せる人が居る。

トモ ヒロシの彼女。もう結婚がしたい。

マサル ヒロシの後輩。相談があると呼び出される。

ダイ マサルの恋人。

「ロマンシングサガ」

ヒロシの部屋。

薄暗い中、PCの画面を見つめるヒロシ。

PCから女性の喘ぎ声。

ヒロシの手にはブラジャー……。

ヒロシ んー、違う…。

しばらく画面を見ては唸るヒロシ。

ヒロシ ああもう違う違う、なんか違うんだよなあもお。

玄関のチャイムが鳴る。

ヒロシ あれ、もうそんな時間（時間を確認しつつ）いやまだ早いんだけど…。

チャイムが鳴る。

ヒロシ （服を着ながら）はいはいちょっと待って。

玄関の鍵が開く音。

ヒロシ え!!

そして玄関の扉の開閉音。

そこへトモが入って来る。

トモ ん、なんだ居るんじゃない。（慣れた様子で電気をつける）

ヒロシ （PCを閉じて）い、居るよ自分の家なんだから…。

トモ 寝てたの？

ヒロシ あうん、つか急に来るなよ、来るなら来るで連絡くらいしろよ。

トモ 何よ今更、いつもの事じゃない…、あつ。

ヒロシ え!!

トモ もしかして、浮気でもしてんの？（部屋を見回す）

ヒロシ してねえーよ、そんなの。

トモ うん、してたらぶっ殺すから(笑)。

ヒロシ …、今日は仕事終わりに友達とご飯に行くって言ってなかった？
トモ そうだったんだけど、その娘がね彼氏と別れるかもしれないって
泣き出すから「じゃあ今から彼とちゃんと話しておいで」って言
ったの、それで暇になったから…。

ヒロシ それならそれでひと言くらい連絡しろよ、こっちにはこっちの都
合があるんだからさ。

トモ (真顔で) えなに都合って？

ヒロシ …いや、今日後輩呼んでんだよ。

トモ (真顔で) 後輩？

ヒロシ …そう後輩。

トモ (真顔)。

ヒロシ ちょっと怖いって顔が、それやめてもらっていいトラウマになり
そうだから。

トモ でもこの顔を含めて好きになったんでしよう私の事が。

ヒロシ いやそうだけど…。

トモ いや、って何？

ヒロシ いや、そう言ういやじゃなくて。

トモ じゃあどう言ういやなの？

ヒロシ ちょっと勘弁してって、そうやって問い詰められると何も悪い事
してないのに何か悪い事している気分になっちゃうから。

トモ 後輩って…。

ヒロシ 男だって男、マサルだよマサル。トモも一度会った事あるでしょ
う。

トモ ああマサル君ね覚えてるよ、今日来るんだ。

ヒロシ うんそうなんだよ、だから。

トモ 久しぶりだな、マサル君私のこと覚えてるかなあ。

ヒロシ いやあの、今日は二人で大事な話をするからトモは帰ってもらっ
てもいいかな。

トモ え、何で？

ヒロシ 何でって…。

トモ いいじゃない私が居たって。ヒロシの事は私が全部知っていて当
然でしょう、だって私たちはいずれ夫婦になるんだし。

ヒロシ だからって…。

トモ それとも、ヒロシは私に何か隠し事でもしてるの？

ヒロシ …。

トモ 何で黙ってるのよ、え何か隠してるの？ おんな、女が居るの？

ヒロシ (部屋の中を探し回る)

トモ 居ないって。

トモ 浮気、浮気してるのっ。

ヒロシ
トモ
してないって、本当に。女も居ないし浮気もしてない。
そうよね、ヒロシが浮気なんてするはずないもんねえ。

トモはヒロシに寄り添う。

トモ
ヒロシ
トモ
だってえ、私たちい、もう付き合ってどれくらい？
んーと…。

(妖艶に) お互い歳も歳だし、結婚して子供が居てもおかしくな
いもんねえ。

トモは部屋の電気を消してムーディな音楽を流す。
そして自分の上着のボタンをゆっくりと順に外してい
く。

トモ
ヒロシ
トモ
そろそろお互いの家に挨拶も行かないと、ねえヒロ君。
うん、違う(部屋の電気をつけて)。

(猫撫で声で) ええ電気つけたままは恥ずかしい、もうヒロ君
のエッチ。

ヒロシ
トモ
やっぱり違うんだよなあ。
え何が、シチュエーション？ 音楽？ それとも私何かのコスプ
レとかした方がいい？ ヒロ君はどういうのが好み(ヒロシに寄
り添う)。

玄関のチャイムが鳴る。

ヒロシ
トモ
あ来た。(玄関へ行く)
あヒロ君、もう何よ間が悪いんだから(身だしなみを整えて)。

ヒロシが戻って来る。
そして後輩(マサル)が入ってきて、続いてもう一人の
男(ダイ)が入って来る。

マサル
ダイ
トモ
マサル
トモ
マサル
トモ
ヒロシ
お邪魔します。
お邪魔します。
あいらっしやい、マサル君久しぶり。
トモさん、お久しぶりです。
覚えていてくれたんだ私の事、嬉しい。
(笑顔で) はいもちろんです。
(ヒロシに) であちらは？
いや俺も初対面で。

マサル あ彼はダイちゃんです。
ダイ どうも初めまして。
トモ どうも初めまして、ヒロシの彼女です。
ダイ ダイです。
ヒロシ 初めまして…。

微妙な空気が流れる。

マサル 彼女さん来てたんですね、てっきりヒロシ先輩一人かと思ってた
ヒロシ んで。
トモ 俺もマサル一人で来るのかと思ってたよ。
ああ私の事は気にしないで一人でお笑いで見てるから。

トモはPCを取ろうとする。
ヒロシは慌ててそれを阻止する。

トモ え、何？
ヒロシ いや別に。
トモ お笑い見るんだから貸してよパソコン。
ヒロシ あの大して面白くない漫才だろう、あの二人どうせもう解散する
らしいし見なくてもいいよ。
トモ えっ、オグバヤシって解散するの？ だったら尚更見なきゃじゃ
ん。
ヒロシ パソコン今からちよつと使うから。
トモ …そう、あ皆立ってないで座ったら男の一人暮らしの何も無い部
屋だけ(笑)。
ヒロシ 飲み物くらいはあるよ。
トモ 何ムキになってんのよ。
ヒロシ いやなっけないよ別に。
トモ …私飲み物持ってくるね。

トモは部屋を出る。
三人はそれぞれ座る。

ヒロシ 何かごめん、あいつ急に来ちゃって。
マサル いえ…、全然構わないですけど。
ヒロシ ん、うん。
マサル …ヒロシ先輩、話って何ですか？ 今日なんか真面目な話があ
るって言うてましたけど…。
ヒロシ え、いや…(一度ダイの方を見る)。

ダイ
…。
マサルも何か相談があるんだらう俺に。
ヒロシ
はいまあそうなんですけど先輩からどうぞ、自分の話はそのあとで。
マサル
え、ううん…。でもまあ俺の話はあとからでいいよ、先にそっちの話から聞くよ。
ヒロシ
え、そうですか…。
マサル
うん…。
マサル
それじゃあ、すみません僕の話からで。…実はこれまだほとんどの人には言っていないで、でもいつも僕の事を良くしてくれるヒロシ先輩だから分かってくれるんじゃないかと思って話すんですけど…。
ヒロシ
うん。
マサル
僕…。

トモが飲み物を持って入って来る。

トモ
ごめんなさいね本当に何もなくて、ギリ人数分はあったけど。あれだったら後で私買いに行ってくるよ。

テーブルに缶を置く。

トモ
お好きなどうぞ、早い者勝ちね私はこれ。ヒロシはどうせこれでしょう、この人好きになったらそればかり本当に子供みたいに。
ダイ
それでヒロシさんはトモさんに一途なんですね。
ヒロシ
ん…。
トモ
えもうやだあ（満面の笑み、そしてヒロシにいちやつく）ねえ。
ヒロシ
（トモに）ちょっと人前でやめろって。
ダイ
（笑顔）
二人はほんと仲良しですね。
トモ
（笑顔で）えそんな事ないって、ねえ。
ヒロシ
（真顔で）うん、全然。
トモ
でもまあ付き合って喧嘩とかはした事ないかなあ、それにさっきもそろそろ結婚しようみたいな話をしててね。
マサル
そうなんですか、おめでとございます。
ヒロシ
いやまだ何も決まっていなから、もうちょっと今はその話は…。
トモ
え何、今更照れなくてもいいじゃん、ねえ。

マサルとダイは微笑む。

ヒロシ
トモ
照れるとかそう言うのじゃないから、それに今はマサルの相談を聞いてあげるとこなんだから入ってこないで。
はあ、何でそんな言い方するの？ 私はただ飲み物持ってきてあげただけなのに、そんな風に言わなくてもいいじゃん。

ヒロシはトモをなだめる。

ヒロシ
トモ
あごめんごめん。
トモ
ごめんごめんってそれ謝ってないでしょう。
ヒロシ
そんな事ないってちゃんと悪かったって思ってるよ。
トモ
ちゃんとして何よ？
ヒロシ
あいやだから、本当に悪かったって思ってる。
トモ
…本当に？
ヒロシ
本当。
トモ
何か違うのよね。
ヒロシ
何が？
トモ
様子が。
ヒロシ
様子？
トモ
そう、女の第六感ってやつ。今日私が来た時も何かソワソワしてたし。
ヒロシ
そんな事ないよ。
トモ
やっぱり何か隠し事してる？
ヒロシ
…んんん、隠してないよ。
トモ
だったらいいんだけど…。

ヒロシのポケットからブラジャーが出ている。

マサル
ヒロシ
先輩、それ。
え？
マサル
ポケットから…。
ヒロシ
ん？

ヒロシはポケットからブラジャーを取り出す。

ヒロシ
トモ
あいや、これは（すぐにしまっ）ちょっと。
トモ
何よそれ？
ヒロシ
いや何でもないって。
トモ
何でもない事ないでしょ、それっ女性物の下着？
ヒロシ
いやまあ、そうだけどこれは…。

トモ ほらっ、もお浮気してる！
ヒロシ いやしてないって。
トモ してるじゃん、ブラジャー片手にしらばっくれないでよっ！
ヒロシ これはだからトモのだって。
トモ トモって誰よっ、どこの女よっ！
ヒロシ お前だろ。
トモ はあ？
ヒロシ いいからちよっと落ち着けて。
トモ …。
ヒロシ これ、お前のだよ。
トモ え、私の？
ヒロシ そう、トモが家に置いて帰ったやつ、ほら（ちゃんと見せる）。
トモ え、なんだ私のか、ってちよっとやめてよ人前で（隠す）もう。

ヒロシはため息をつく。

トモ て言うか私の下着もって何してんの？
ヒロシ は？
トモ さっき私が迫った時は清ました顔してたくせに。
ヒロシ ちよっとやめろって人前でそう言うの。
トモ 欲求不満なら素直にそう言えばいいじゃん。
ヒロシ ちよっと。
トモ 別に付き合ってたんだしいいじゃん、子供じゃあるまいし。
マサル あの僕たち今日は一旦帰りましょうか、ねえ。
ダイ うん、その方がいいかもね。

二人は立ち上がる。

ヒロシ いやいいよ、大丈夫だから。
マサル でも先輩、欲求抑えられます？
ダイ 抑えられますう？
ヒロシ 抑えられるって、むしろ全然そんな気分じゃないし。
マサル そうですか。
ダイ ですかあ。
ヒロシ そうだよ、だから話、続けよう。
マサル 先輩がそう言うんなら、ねえ。
ダイ うん、そう言うんなら。

二人座る。

ヒロシ　そう言う事だからさ、トモはちょっと外してもらってもいい。
トモ　うん、わかった。
ヒロシ　うん。
トモ　じゃあうちでお笑いでも見てるから、話が済んだら言ってね（P
Cを持って行く）。
ヒロシ　（座る）ゴメンゴメン…、で何だっけ相談って。
マサル　あはい…、実は僕…。

奥から女性の喘ぎ声が聞こえてくる。
三人は黙る。
トモがPCを持って入って来る。

トモ　やっぱり我慢してるんじゃない。
ヒロシ　ちよっと何見てんの？
トモ　お笑い見ようと思ってパソコン開いたら（PCを見せる）これが。
ヒロシ　ちよっと（PCを取り上げて）何してんの？
トモ　何してんのって、私はただパソコン開いただけじゃん。そしたら
それが始まったんでしよう。
ヒロシ　もう。
トモ　我慢は良くないよ、って言うかも済んだの？
ヒロシ　済んでないよ、いやいやそう言う事じゃなくて、だから…。
マサル　やっぱり僕たちは帰った方が。
ダイ　帰った方があ。
トモ　ごめんなさいね。
ヒロシ　いや帰らなくていいって。
マサル　でも。
ダイ　ねえ。
トモ　我慢は体に良くないよ。
ヒロシ　…わかった、我慢しない。
トモ　うんそれがいい、作ろっか子供。と言う事でゴメンなさいねマサ
ル君たち、今日のところは一旦帰ってもらっても。
マサル　あはい。
ダイ　はい。
ヒロシ　俺、トモの事が。
トモ　待ってヒロシ、焦らなくても私は何処にも行かないから。
ヒロシ　好きじゃない。
一同　!?
ヒロシ　俺やっぱりトモの事をそう言う風に見れなくて。
トモ　は？　え何そう言う風ってどういう事？
ヒロシ　だから今はもう恋人としては見られないんだよ、トモの事を。

トモ …なに今更。
ヒロシ 今更じゃなくて結構前から悩んでたんだよ、でもなかなか言い出せなくて…。

マサルとダイは去ろうとする。

ヒロシ 二人にも聞いてほしい。

マサルとダイは立ち止まる。

トモ マサル君と大事な話をするってその事だったの？

ヒロシ …まあ。

トモ だったらそれはマサル君とじゃなくて、まずは私とすべきなんじゃないの？

ヒロシ …。

トモ 私がどういうつもりで今までヒロシと付き合ってるのかわかって

るでしょう。若い頃のようにただ恋愛を楽しむとかそんなのじゃなくてさ、ちゃんと将来の事を考えて、結婚とか子供の事とか色々考えて真面目に向き合ってるのに何で今更そんな事が言える訳？

ヒロシ …。

トモ 何かあるならその時ちゃんと相談してよ、…黙ってないで何とか言ってみてよ。

ヒロシ 言いづらくて…、誰にも言えなかったんだよ。

トモ やっぱり浮気してるの？

ヒロシ してない、それは本当に、してない。

トモ じゃあ、好きな女でも出来た？

ヒロシ …好きな女はいない。

トモ じゃあ何なのよ、ハッキリ言ってよ、もおお男でしょう！

ヒロシ …好きな人がいるんだよ。

トモ は!? さっきいないって言ったじゃん嘘つき。

ヒロシ 嘘はついてない。

トモ …意味わかんない…。

ヒロシ …。

ダイ もしかして好きな人が女性じゃないって事ですか？

トモ え!!

ヒロシ …うん。

トモ えじゃあ好きな人って、男の人ってこと？

マサル 先輩の話ってその事だったんですか？

ヒロシ うん、まあ。

ダイ 確かに言いづらいですよ、わかります。

トモ
ヒロシ

いや、ちょっと良く分かんない私。
最初は自分でも良く分かんなかったんだよ、でも少しずつネットとか見て調べてるうちに、あ俺もしかしたらそう言う事なのかなって思ってた。

トモ
ダイ
トモ

え何、ヒロシは、ホモって事？
トモさん、その表現はあまり良くないです。

ヒロシ

でも女の人を好きになったのも事実で、でも今の気持ちは男の人
も好きになっていて。

トモ

えじゃあ何ヒロシはその、いわゆるその（言葉を探して）ゲイっ
て事？

ダイ

いやバイですね、今のところ。
は？

ヒロシ

俺もまだ自分の事なのによく分かってなくて、でもそう言う事み
たいで。だからごめんトモ、俺トモと結婚できない。自分の気持
ちに嘘ついて一緒になってもお互いに苦しくなるだろうし。

トモ

…何なのよもお、何年も一緒に居てさあ今更好きじゃないって。
そりゃあ男の人はいいわよ、ある程度年とっても何とかなるから。
でもね私達女性はこの年になってくるとね、結婚や出産の事を考
えずにはいられないのよわかる？ 色々逆算しながら生活設計立
てなきゃならないの、分からない？

ヒロシ

…。

ダイ

分かります。

トモ

あんたは黙ってて。

ダイ

はい。

トモ

浮気相手がいる訳でもなくて、おまけに好きな相手が男だなんて。
私はこの怒りの矛先をどこに向ければいいのよ…。私の恋のライ
バルは女じゃなくて男？ もお戦い方が分かんないっ！
なんか、ゴメン。

ヒロシ

…その、ヒロシの好きな相手はどここの女よ。

トモ

…。

ヒロシ

あ男よ。…まだ私はヒロシの彼女なんだからそれくらい知る権利
はあるでしょう。

ヒロシ

知ってどうするんだよ。

トモ

どうもしないけど、ただ知りたいだけ、怖いもの見たさって言う
か「ああヒロシは私より、この男とキスしたいんだ」って…、あ
あ私もう何言ってるのよ頭が変になりそう。

ヒロシ

…マサルだよ。

マサル

!!

トモ

何？

ヒロシ

トモ

ヒロシ

俺の好きな相手はマサルなんだよ。
…。

いつからかマサルと一緒に居るだけで心臓がドキドキして、そのうちそれが恋だって気づいてからは、もう俺の頭ん中はマサルでいっぱいになっていて…。もっと近づいて手を繋ぎたいし、抱きしめたいしキスだってしたい…。(マサルに向かって)好きだ！

(悲鳴をあげる)

俺マサルの事が好きなんだ。

…ヒロシ先輩、今日呼び出したのって…。

そう、この俺の気持ちを直接伝えるために呼んだんだ。振られてもいい、むしろハッキリ振られた方が今のモヤモヤした気持ちに整理がつけやすいし。そしたらまたちゃんとトモとも向き合えるだろうと思ってる…。

トモ

はあ、何私は保険、キープ、しかも男の次？ 振られてダメだったからやっぱり私のところに戻りますって、何調子のいいこと言ってるのよ。相手が男だからってそんな事が許されるとも思ってるの、そんなのこっちがお断りよっ！

だからトモ抜きで話そうとしてたのに無理やり入ってくるから。

ヒロシ

トモ

まあまあ二人とも落ち着いて。

ダイ

あんたは黙ってて。

トモ

はい。

勘違いしないでよ、大体ねえヒロシくらいの男なんて何処にでも居るのよ。

ヒロシ

は？ くらいって何だよ。

トモ

だってそうでしょ、安月給で特に金持ちでもないし、何かよく分か

ヒロシ

かんない会社のサラリーマンだし。

トモ

よく分からない会社とか言うなよ。

トモ

そもそも顔だって大した事ないので、それを私は妥協して付き合

トモ

ってあげてたんでしょ。

ヒロシ

妥協、付き合っただけでた？

トモ

だって本当の事だし。

ヒロシ

ああだったらこっちも本当の事を言わせてもらおうけどなあ、大して取り柄もない、可愛げのない中途半端なメンヘラの相手するの

トモ

は懲り懲りなんだよ。

はあ？ 中途半端って何よ、それに私メンヘラじゃないし。

トモ

そんな女と将来一緒に生活するって考えただけでも息苦しくて溺

ヒロシ

れそうなんだよ。

トモ

勝手に溺れる。

ダイ

まあまあ二人とも落ち着いて。

トモはダイを睨む。

トモ (マサルに) 好きなんだってヒロシが、どうすんの？
…。

トモ (嘲笑して) 付き合っただけあげる？
それはダメです。

トモ ダイ あなたは関係ないでしょう、さっきから何よちよいちよい煩いわね。

ダイ (勇気を出して) マサルには恋人が居るので。
ちよつと…。

トモ (笑ってヒロシに) はい残念でした。
まあ彼女が居なかったとしても、男の俺じゃなあ。

トモ そらそうでしょ、いけると思う方が可らしいでしょ。
やっぱ俺、可笑しいよな。

トモ そんな事ないです、可笑しくなんかないです全然。
…。

トモ 誰がどんな人を好きになろうとその人の自由ですし。
うんうん。

マサル 僕は嬉しかったです、ヒロシ先輩の正直な気持ちを僕に打ち明けてくれて。

ヒロシ え、それじゃあ。
嘘でしょ。

トモ でもゴメンなさい。
だよねビックリした。

ヒロシ 彼女いるんだもんね。
いや…。

トモ 彼女いるとかいないじゃなくて、あんた男だし(マサルに) ねえ。
…。

マサル マサル君、もうその彼女と別れていっその事私と付き合わない？
何言ってるのお前。

トモ マサル君ヒロシよりもよっぽどイケメンだし、私恋人には尽くすわよ。

マサル (苦笑い)
どう？(寄り添う)

ヒロシ お前誰でもいいのかよつ。
男女構わず好きになるあんたに言われたくないわよつ。

トモ ダイ ダメです。
誰もあんたに聞いてないわよ、全然タイプじゃないし。

ダイ 僕もタイプじゃありません。

トモ
ダイ
トモ
ヒロシ
トモ
ダイ
結構。
それに自分は恋人がいるのでゴメンなさい。
何で謝るのよ、私が振られたみたいになるからやめてよ。
（笑って）告白する前に振られてんの。
だから振られてないし、誰がこんな醜男に告白するのよバカじゃないの。
失礼な…。

マサルはダイを制して。

マサル
トモ
マサル
トモ
ダイ
マサル
ヒロシ
トモ
マサル
トモ
ダイ
自分で。
はい？ 何が？
…告白したの？
告白したの？
（マサルに）ちょっともういいよ。
いや。この人に告白する様な人は、僕です。
え!!
ちよっと何を言ってるのかよく分からない。
ヒロシ先輩、実は僕、彼と付き合ってるんです。今日はその事を話そうと思ってここに連れて来たんです。
あ、えっ？ そうなの…。
先輩なら僕のセクシヤリティを分かってもらえるとあって、だから…。
え嘘っ、マサル君もそう言うやつ。
自分もね。

ダイはマサルの腕を組む。
そして一度顔を見合って笑顔で頷く。

ヒロシ
マサル
ダイ
トモ
ヒロシ
ダイ
ヒロシ
トモ
はい。
ゆっくりでいいんですよヒロシ先輩も。
じゃあマサル君も所謂その…ホ…ゲイって事？
いや以前は彼女がいたんだもんね、だから俺と同じバイ？ バイ
セクシユアルって事だよね。
いや、マサル君はバイではなくパンです。
パン？
は？ 乃が美…。

ダイ 乃が美は知りませんけど、パンセクシユアルです、ねマサル君。
マサル うん、今のところはそうみたいなんです。
トモ 今のところ…？

ダイ ゴメンちょっとまだそっちの世界の事がよく分かってなくて。
大丈夫、安心して。マサル君も自分もヒロシ先輩の味方だから、
ゆっくり少しずつ理解していけばいい。
そうですよ。

ヒロシ …うん。
マサル 僕も初めは自分のセクシャリティに気がついた時は戸惑いまし
た。今も特定の信頼できる人にしか話していませんし。
自分だって同じようなもんで…。

ダイ ダイちゃん。
マサル ？

ダイ もういつも通りでいいよ、喋り方。
え、うんそうね。もう此処の皆は知ってるんだもんね、うちの
こと。

マサル うん。
ダイ 私も最初は苦しかったわ、でも今は大丈夫マサルもいるしね。父
親には勘当されちゃったけど…。

二人笑顔。

ヒロシ あの一つ聞いてもいいかな？
ダイ ええもちろん。

ヒロシ ダイちゃんはその…どっちかな、ゲイなのバイなの？
マサル ダイちゃんはゲイでもバイでもないよ。

ヒロシ じゃあマサルと同じやつ？
ダイ パンでもなくて、私はクイア。
ヒロシ クイア？

ダイ そう、誰がどんな風に私の事を見ようと構わないけど私は私らし
く生きていくの。

ヒロシ うんそう、やっぱり俺まだちょっと分からないや。
トモ 私、全然分からない。

マサル (笑顔で) 僕だってそうだよ。
ダイ ねえ皆勘違いしてない？
ヒロシ え？

ダイ 親兄弟や恋人、あと結婚したって所詮は他人なんだから、すべて
を分かってくれる人なんていないのよ、なに買い被ってるのよ。
でも唯一分かってくれる人がいるなら、それは自分よ。まずは自
分で自分を認めてあげるそこからよ。

ヒロシ
ダイ
ヒロシ
ダイ
マサル
ヒロシ
マサル
ダイ
そうか、自分を認める…。
そう自分のありのままを受け入れて、それを肯定して生きていく、
胸を張ってね。
うん。
あ、いい顔になった（マサルに）ねえそう思わない？
うん、いい顔。
えそう？
うん。
あちよつと、浮気は許さないわよ。

三人顔を見合わせて笑う。

マサル
ヒロシ
ダイ
マサル
ダイ
マサル
ヒロシ
ダイ
ダイちゃんって頼もしいでしょう。
そうだね、何かマサルがダイちゃんに惹かれるのが分かる気がする。
私こう見えても以外にモテるのよ（笑）。
すぐに調子に乗るう（二人いちゃつく）。
あそうだ、ねえこれから少し飲みに行かない？ 私の友達がやつ
てる店があるから。
行きましよう先輩。
うん。
じゃあ決まり。

ダイはヒロシの背中を押しながら。

ダイ
ヒロシ
ダイ
そのこの娘はゲイなんだけど彼氏募集中よ。
あそうなんだ。
紹介してあげる。

ヒロシとダイは出て行く。
マサルは立ち止まり。

マサル
トモ
マサル
トモさんもどうですか？
いや遠慮しとく。
そうですね、それじゃお邪魔しました。（行く）

トモは独り残され。

トモ
分からない…分からない、ねえ普通の人はいないの普通の人は…。
え、私が変わなの？ 私が普通じゃない？ 私は、女…よねえ…え

何？ 私は…ひと……。

部屋が暗くなっていく。

PCを開くトモ。

PCから漫才が聞こえてくる。

薄暗い中、画面を見つめるトモ……。

暗転。

—幕—